

読書感想文

〈最優秀賞〉福島民報社賞

優しさと強さの瓜生岩子さん

喜多方市立熊倉小学校 五年

瓜生岩子さんについて調べると、「社会福祉の母」や「日本のナイチンゲール」といつた言葉が出てきます。私はそこから岩子さんに対し、大学の教授や医師のような人をイメージしていました。けれど、その印象は本を読み始めてからすぐにくつがえされました。けれど、岩子さんは、いい意味でとても普通の、優しい人でした。そして、幼少期に父を亡くし、その後も、火災で家をなくしたり、夫や母が相次いで死んでしまったりと、つらい思いを人一倍している女性でした。私は、本を読みながら岩子さんはどうなってしまうのか心配でたまりませんでした。そんな絶望のさなかに岩子さんは、示現寺の和尚さんからこんなことを言われます。「他人の喜びを自分の喜びとしなさい。おまえにはそれができる」と。ここから、岩子さんの第二の人生がスタートします。私はこの言葉から、岩子さんは強さをもらったのだと思います。私はこの言葉か

それは、常に弱者や、しいたげられている人を救い続けました。それは、戦争における病人やけが人、農村の赤子、身寄りのない子どもやお年寄りなどです。そこには、戦争での敵だとか、身分だとかは関係ありません。

私は自分のことを振り返ってみました。私も困っている友達にはすぐや声をかけ、手を貸すことができます。けれども、親しくない人、ましてや知らない人にそんな風に接することができるだろうか。そう考えると、私は、岩子さんの優しさと強さを心から尊敬します。そう考える

岩子さんは、もつと多くの人を救うために「救養会所」を作ろうとします。救養とは、「貧しい人やよるべない老人を救い、親のない子を養い育てる」という意味です。また、岩子さんは、守り助けて終わるのではなく、測量を教える教習所を作ります。優しさだけでなく、自立する強さを

持てるようにしたのです。私は、人を救うことは、ただその人を甘やかすこととはちがうことを知りました。

私も岩子さんのような「優しさ」と「強さ」の両方を持つ人になりました。

そのために、自分の親しい人だけでなく、困っている人がいたら、すかさず助けるようにしていきたいです。人を差別せず、だれにでも公平に接することや少しの失敗ですぐにあきらめないことも。今は、新型コロナウイルス感染症の流行を受けて困っている人が日本中にいます。差別されて悲しい気持ちになっている人の話も聞きます。もし岩子さんが生きていたら、そんな人たちを助け、差別する人のことをしかつてくれ

たと思います。今の私たちに岩子さんが伝えてくれたことを大切にしたいです。少しでも近づけるようにしたいです。